永久に疑はざるものなり、あゝ一人の左袒者あらば腑毫の幸甚何物か之に加へむ。

◎修　養

文科四年　櫻井藤枝

銀燭煌々として綠酒灑の如き中に坐し悠然として浩歌妙舞する者その歩武は蹣跚たりその意氣は揚々たり、悠忽背後千仞の斷崖峨々として怪雲その半を蔽ひ猛獸魔神の叫び山彦と相應へ脚底萬里の蒼波轟然白山を崩し龍頭岩に狂ひ飛沫衣を濕す此の際この機彼等は愕然として心戰き氣息奄々將に絶えなんとすこゝに於て心意轉た昏迷懊惱して絶叫せんとして始めて黑暗鄉裡の一夢たるを知る嗟乎滔々たる天下それ夢中の人にあらざるもの果して幾許ぞ。

思ふに一の大國家には必ず一の大精神あり而してその盛衰消長は直ちに國家の治亂興亡を伴ふものにして恰も國家は人類の體軀の如く精神はなほその軀體の如し。

靈活せる一大精神ありてその美その妙の個人の上に表はれ來るもの或は正義至誠の念となり或は尊敬扶持の道義となり以て能く風敎をして醇ならしめ以て能く治化をして隆ならしむべし

我が國は天祖國を肇め給ひ天壤無窮の神勅と共に金甌無缺千古萬古亦動くことなし故に國家の大精神は最も强固にして磅礴として大八洲に充溢せり日本魂と稱するもの即ち是れなり。

吾人は史を繙く毎に我が國の大精神たる日本魂の一部が武士道として武門の間に現はれ來りたるを見て所謂古道の俤をこゝに偲ぶと共に更に日本魂全部の發揚を望んで止まざるなり。

古來英武一世の風雲に鞭ちて蹶起し倒山飜海の活劇を演じ雄を稱し覇を成すものを觀るに必ずやその幕僚に高大至誠超然として傑出せる精神的の偉人あるを要す源頼朝に和田義盛あり豊臣氏に加藤清正片桐且元あり德川氏に井伊直政大久保忠隣酒井忠勝あり是に反して國を亡ぼし社稷を顚覆せるものを觀るに多くは是れ偉人を遠けて小人を近づけ德義を輕んじ利口辯佞の徒を重んぜざるもの殆ど稀なりかの源氏に梶原景

時北條時政あり豊臣氏に小西石田大野ありしが如き思ふに是れ必ずしも彼等愚者ならんや彼等悉く痴漢ならんや只彼等は理想低く私利に耽り私慾を貪らんとし精神の根抵を捨て術數の末に走りたるによるのみ嗚呼これ抑々既往の事蹟として輕忽に看過すべけんや。

維新以來泰西の文物驀然として入り來るや物質的文明は頓にその面目を改めぬ而して我が精神の眞粹は稍、國民の腦裡をはなれんとし輕薄風をなし朝野の間にありて評判よき士は謹嚴至誠の精神的の人にあらずして融通的才子たるなり正直を稱て野暮とし篤實を嘲りて變通をしらずといふ今や黃鐘棄擲せられて瓦釜雷鳴すあゝ國家精神の衰へたる一に何ぞこゝに至るや。

人やゝもすればいふ天下のために一身を犧牲に供すと又曰く國家のために身命を擲つこと弊履よりも易しとその意氣亦盛なりといふべし。しかも是れかの夢中浩歌妙舞する者と孰れぞ忽ちにして泰山裂け滄海溢れ迅雷風烈天地を震憾して至るの刹那顏色菜よりも青からざる者幾人かある遮莫東洋の潮流彌急激にして殺氣まさに鬱勃たり軍艦造らざる可らず兵備擴張せざる可らずしかも最も急とすべきものは國家大精神の修養にあらずして何ぞ夢見る者よ起てよ醉へる者よさめよ封豕長蛇は白き牙を磨き紅の舌を吐きて二六時中汝の前後左右に朶頤しつゝあるを知らずや。

◎山の火

文科四年　長谷川すが

火事よ火事よといひながら、たれも手のつけやうのない東の山は、夜になつて、ます〳〵燄に燃え出した。

「山やける獅子をどる猿が豆食てのどきつきつ」とうたつてゐた里の子は、はや夢路に入つた火のもとは分らない、連日のてりで、乾きゝつた、多くの木がすれあつて、火をおこしたのかも知れないと、或物知りはいつた。

こゝは、鶴の首とよんで、御國自慢の一にかぞへられ、常綠木のしげりにしげつた中央には